

## 研究における利用資料

茶業史研究では、主に茶業界関係の文献や資料などを利用するケースが多いといえます。業界関係の文献でいえば、戦前期のものですが茶業組合中央会議所編『**日本茶業史**』（茶業組合中央会議所、1914年）・加藤徳三郎編『**日本茶貿易概観**』（茶業組合中央会議所、1935年）など、日本茶業・茶貿易全体のことが記されたものがあります。また、静岡県茶業組合連合会議所編『**静岡県茶業史**』（静岡県茶業組合連合会議所、1925年）をはじめとする各地の茶業組合が編纂した文献も利用価値は高いといえます。なお、**これらは小川後楽氏の監修、寺本益英氏の編纂で文生書院から『日本茶業史資料集成』全24冊として復刻版がすでに出ています。**

戦後においても、日本茶輸出百年史編纂委員会編『**日本茶輸出百年史**』（日本茶輸出組合、1959年）が発刊されており、これは特に戦前の茶輸出を知るうえでとても参考になるものです。また、20世紀に入ってからのもので、日本紅茶協会編『**20世紀の日本紅茶産業史**』（日本紅茶協会、2003年）が発刊されています。これは日本の紅茶生産や紅茶の輸出入の状況を窺い知ることができる貴重なものといえます。

茶の生産量や輸出量・輸出額については、農商務省がまとめた『**農商務統計表**』、統計局がまとめた『**日本帝国統計年鑑**』、大蔵省がまとめた『**大日本外国貿易年表**』などをあげることができます。これら以外では、『**静岡県統計書**』をはじめとする都道府県が出している統計資料がありますが、こちらは各郡の生産量など、より詳細なデータを得ることができます。

また、茶業とは直接的に関係はありませんが、清水港で港湾業務を営む鈴与・天野回漕店・アオキトランスの3社が発刊している社史についても、静岡茶の輸出に対する理解を深めるうえでは必読の文献といえます（現在までのところ、鈴与社史編集委員会編『**鈴与百七十年史**』（鈴与株式会社、1971年）、天野回漕店社史編纂室編『**天野回漕店二〇〇年史**』（株式会社天野回漕店、2000年）、鈴与二〇〇年史編纂委員会編『**鈴与二〇〇年史**』（鈴与株式会社、2002年）、創立90周年準備委員会編『**港とともに90年史**』（アオキトランス株式会社、2004年）の4冊が発刊）。

このほかには、静岡県『**静岡県史**』通史編5近現代1（静岡県、1996年）をはじめとする都道府県および市町村が編集・発刊している自治体史も見過ごすことはできません。

## 歴史的資料の保存と活用

ただし、以上列挙した文献・資料には、手書きの文書、あるいはまだ活字化、復刻されていないような資料がほとんどありません。もちろん、こうした資料のなかですでにデジタル化されているものは利用されています。インターネット回線がつながっている環境であれば、①**国立国会図書館デジタルコレクション**（<http://dl.ndl.go.jp/>）、②**国立公文書館デジタルアーカイブ**（<https://www.digital.archives.go.jp/>）③**国立公文書館アジア歴史資料センター**（<https://www.jacar.go.jp/index.html>）などを通じて閲覧・複写することができます。特に③からは、清水開港運動に関する多くの請願書を見ることができます（粟倉大輔『日本茶の近代史』、255ページを参照）。

茶業史関係の歴史的資料では、こうした動きはまだそれほど進んでいないのが現状ですが、今後は、以下に掲げるような茶業史関係の歴史的資料の保存・管理の在り方を考えていかなければなりません。

今回の展示会でもその一部が展示されていますが、現在静岡産業大学には静岡県茶業試験場研究主幹や静岡茶市場の検査部長を歴任された**森菌市二**氏が残された文献・資料が保管されています。このなかからは、戦前から戦後にかけての日本茶業や茶輸出、特に**戦後の北アフリカなどへの輸出についての文献・資料**が散見されます。現在これら資料は全て静岡県立大学グローバル地域センターで一時的に保管しており、資料の調査・整理を行っているところです。ゆくゆくはセンターでこの森菌氏の資料をデジタル化・アーカイブ化していくことを目指して作業を進める予定です。また、茶の再製・輸出に深く関わった**原崎源作が残した富士製茶関係の資料**もまた、グローバル地域センターで分析を進めていき、その保管・活用に向けての作業に取り掛かることを考えております。

歴史的資料は、先人が残した貴重な遺産であることから、その破損・散逸は絶対に防がなければなりません。また、現在はもちろん後世の人々にも伝えていかなければならないものでもあります。さらに、単に保存するだけでなく、こうした資料を広く研究者に公開し、大いに活用してもらえるような仕組みも整えなければなりません。保存・管理は言うまでもありませんが、今後の茶業史研究の進展のためにも、一気呵成に進めていくのは難しいところもあるでしょうが、そのデジタル化・アーカイブ化を推進していくことが求められています。